

# 平安漢詩文化圏と女性\*

-その屈折した二重性を中心に-

鄭 順 粉\*\*

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 漢詩文に対する女性の表面的な姿勢
  3. 理想的な宮中の女性像
  4. 女房の出世と漢詩文
  5. おわりに
- 

## 1. はじめに

平安時代の初期に隆盛した漢詩文は、攝關政治の絶頂期の一條朝に復興し、宮中を中心にした漢詩文化圏が最も活潑になる。この時期の特徴は、専門文人だけでなく、公卿や宮中官人の中からも多数の詩人が輩出され、漢詩文の享受層が大きく拡大された点にある。その背景には實権者の政策的な意圖があり、藤原道長は内裏や自分の邸宅で頻繁に詩會を開催し、それを通して貴族の結束を圖るとともに風流を楽しもうとしていた<sup>1)</sup>。

では、假名によって文學を營爲していた女性は、この男性貴族の主導による漢詩文化圏とどれほど関わりを持っていたのだろうか。従來の研究においては、女性の漢詩文化圏への接觸を、主に後宮で男性貴族を相対にし機智をふるまう手段として解していた。それは、女性が男性貴族の前で漢詩文表出をはばかり、直接的な漢詩文引用を避けようとする姿に大きく依存するものである<sup>2)</sup>。しかし、私見によれば、女性、特に宮中女性にとって、漢詩文はそれより遙

---

\* 本論文は、2004年度の韓國學術財団の支援によるものである(KRF-2004-041-A00381)。

\*\* 培材大學校 日本學科 助教授 日本古典文學

1) 平安中期の詩壇の傾向については多くの論文において論じられている。例えば、藤原克己氏(1995・5)「王朝漢詩の意義について」『國語と國文學』や、池田源太氏(1967・11)「平安朝に於ける文章の経國的性格の変色」『龍谷史壇』、後藤昭雄氏(1969・8)「一條朝詩壇と本朝麗藻」『國語と國文學』などに述べられている。

2) そのような当時の女性漢詩文受容の様相については、例えば西村富美子氏(1984)「平安女流文學と漢詩文」『國際仏教大學文學部紀要』、山本利達氏(1990・12)「漢學と女性—紫式部日記覺書」『滋賀大國文』、志村綠氏(1986・6)「平安時代女性の眞名漢籍の學習—一世紀ごろを中心に」『日本歴史』などに詳しい。

かに大きな意味合いを有するものであった。すなわち、天皇の后や女房のような宮中女性にとって漢詩文は、表面的にはそれに關する素養を隠蔽しようとする姿勢を取りつつも、實は立身出世のためには必須のものであり、それゆえ何とかして漢才を發現しようとしてつとめた、二重的なものだったと考えられる。

本稿では、平安時代の女性が當時男性主導の漢詩文化圏といかに緊密な關係を有しているかを考察し、漢詩文における女性の視座を新しく設定することを試みる。

## 2. 漢詩文に對する女性の表面的な姿勢

當時の貴族女性の一般的な教養としては、藤原師尹が愛娘芳子(宣耀殿女御)に行ったお后教育の中で次の三つがあげられている。

まだ姫君と聞えける時、父大臣の教へ聞えきこたまひけることは、「一には、御手を習ひたまへ。次には、琴の御琴を、人より異に弾きまさらむとおぼせ。さては、古今の歌二十卷を皆うかべさせたまふを、御學問にはせさせたまへ」となむ、聞えたまひける、(『枕草子』二〇段)<sup>3)</sup>

すなわち、女性が教養として身に付けるべきものは、手習・琴・和歌であると記されている。學問的に見れば、和歌が女性に要求された徳目だった。女性が漢詩文に對してきわめて受動的な姿勢を見せたのは、そのためである。當時漢文は、男性の教養にされるのが一般的だったのである<sup>4)</sup>。いくら漢學に關する素養があっても、女性はそれを表に出すことを極力避けていた。次の例を見てみよう。

李炫瑛(建國大學校) 今宵は後の宮參上りたまへり。台盤所に候ふ御達、いと多かり。かかることありとて、御簾のもとに後の宮おはせば、上は、大將に御目くはせて、みそかに詠ませたまふ。後の宮、「内裏こそ聞かせたまはざらめ。講師は心せよ」とのたまへば、え讀まで、爪くひもて候ふ。上、「いと悪き朝臣なりけり。かくな臆せられそ。ただいふに従ひて讀め。これは誰も誰も讀みつべけれど、そゑに異人の讀むまじき由のあれば、まつ讀ますぞ」とのたまへば、少し高く讀む。所々は聲にも讀む。後の宮いみじう憎みたまふ。されどいとよく聞こしめす。異人はえ聞き知らず。(『宇津保物語』「藏開 中」)<sup>5)</sup>

3) 『枕草子』の本文引用は、石田穰二氏校注(1979・8)『枕草子 上』角川文庫による。以下同様。p35。

4) 當時、漢字は「眞名」といって「男文字」とされていた。

5) 『宇津保物語』の本文引用は、中野幸一氏校注(2001・5)『宇津保物語』新編日本古典文學全集 小學館による。以下同様。p474-p475。

朱雀帝、東宮、五の宮の前で俊蔭の母の集を講書しているところに後の宮が登場し、仲忠は躊躇しながらも読み進めるしかない。女性が理解できないように漢字になっている部分を音読みするが、後の宮はそれを憎むふりをしてはいるものの、實は漢字の素養があるためみんな分かっている。女性の場合、男性の教養であった漢學に關する學識があってもそれを露わにすることはなかったのである。

そのように当時の女性が漢詩文的素養の表出に消極的であったのは、当時女性の漢才を白眼視する傾向があったからであろう。平安時代の女流歌人で、女房三十六歌仙に数えられる高階貴子(高内侍)は、中關白藤原道隆の妻となり、内大臣伊周や一條天皇の中宮定子を生んでいるが、女ながらに詩文に長けており、その様子が『大鏡』など諸書に見える。しかし、貴子の學才について、世次の翁は次のような評語を記している。

母上は高内侍ぞかし。されど、殿上えせられざりしかば、行幸・節會などには、南殿にぞまゐられし。それはまことしき文者にて、御前の作文には、文奉られしはとよ。少々の男にはまさりてこそ聞こえはべりしか。しゃうの折、召しありけるにも、台盤所の方よりはまゐりたまはで、弘徽殿の上の御局の方より通りて、二間になむさぶらひたまひけるとこそうけたまはりしか。古体にはべりや。「女のあまりに才かしきは、もの悪しき」と、人の申すなるに、この内侍、後にはいといみじう墮落せられにしも、その故とこそおぼえはべりしか。 (『大鏡』「道隆伝」)<sup>6)</sup>

すなわち、貴子は漢詩文に秀れ宮廷作文會にも参加し普通の男性を凌駕するほどの才女であったが、學才があまりにも優れたため、結局は、世間で言うように、零落してしまったと言っている。

また、後のところに出仕した女房の場合も漢學的素養を露骨に表すことは同じく敬遠視していた。

大きな廚子一よろひに、ひまもなく積みてはべるもの、ひとつにはふる歌、物語のえもいはずの巢になりたる、むつかしくはひ散れば、あけて見る人もはべらず、片つかたに、書ども、わざと置き重ねし人もはべらずなりにし後、手ふるる人もことになし。それらを、つれづれせめてあまりぬるとき、ひとつふたつきいでて見はべるを、女房あつまりて、「おまへはかくおはすれば、御幸ひはすくなきなり。なでふをんなが眞名書は讀む。むかしは經よむをだに人は制しき」と、しりうごちいふを聞きはべるにも、物忌みける人の、行末いのち長かめるよしども、見えぬためしなりと、いはまほしくはべれど、思ひくまなきやうなり、ことはたさもあり。  
(『紫式部日記』)<sup>7)</sup>

6) 『大鏡』の本文引用は、橋健二氏・加藤静子氏校注(1996・6)『大鏡』新編日本古典文學全集 小學館による。以下同様。p258-p259。

紫式部が亡くなった夫(藤原宣孝)の所藏品である漢籍を讀んでいると、侍女は不幸になるから止めてほしいと言う。当時女性が漢詩文を習うと、男性の世界である政治板に巻き込まれ思わぬ災難に遭遇することを恐れたからであろう。それに關連する場面が『源氏物語』の中に見られるが、品定めにおいて、左馬頭は、藤式部丞の語った蒜の女の話を書いて次のように述べる。

「すべて男も女も、わろ者は、わづかに知れる方のことを残りなく見せ盡くさむと思へるこそ、いとほしけれ。三史五經、道々しき方を明らかに悟り明かさむこそ愛敬なからめ、などかは女といはむからに、世にあることの公私につけて、むげに知らずいたらずしもあらむ。わざと習ひまねばねど、すこしもかどあらむ人の耳にも目にもとまること、自然に多かるべし。さるままには眞名を走り書いて、さるまじきどちの女文に、なかば過ぎて書きすすめたる、あなうたて、この人のたをやかならましかばと見えたり。心地にはさしも思はざらめど、おのづからこはごはしき聲に讀みなされなどしつ、ことさらびたり。上臈の中にも多かることぞかし。

(『源氏物語』「帚木」)<sup>8)</sup>

女同士の手紙にも、漢字を半分以上用いる者があり、そんな女には女らしさが欠けていて残念に思われると言う。本人はさほどにも感じなくても讀む側としてはごつごつした聲で讀ませられることになってわざとらしい感じになる。さらに当時才名が高かった高内侍—上掲した高階貴子—を暗にさして日頃上流婦人の漢字使いについて批判を加えている。漢字というものは、形からして、女らしさを美德とする女性には結び付かない。さればこそ、女手が造られたことを思えば、漢字の音も不自然な聲に讀まれ、王朝の女性には相應しくないことだったのであろう。三史五經のようなものを正式に學ばなくても、才能ある女なら、目にし、耳にして、自然漢學の知識を會得することになるが、ここではそれを得意そうに外に出すのは困りものだと言う。そのような立場から、漢學の才は女に不幸をもたらすというような言葉になり、それが認識として定着したようになったと考えられる。つまり、女に女らしさを要求する立場から、女の漢學の才を表すことを止めさせようとして女の漢學の才は不幸を招くという戒めとなったのであろう。

しかし、それにもかかわらず、學才のある女性は何かの形で漢學の素養が表に出され人に知られるようになる。

左衛門の内侍といふ人はべり。あやしうすずろによからず思ひけるも、え知りはべらぬ、心憂きしりうごとの、おほう聞こえはべりし。

7) 『紫式部日記』の本文引用は、中野幸一氏校注(1994・9)『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』新編日本古典文學全集 小學館による。以下同様。p204。

8) 『源氏物語』の本文引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男氏校注(1994・3)『源氏物語①』新編日本古典文學全集 小學館による。以下同様。p89。

内裏のうへの、源氏の物語人に讀ませたまひつつ聞しめしけるに、「この人は日本紀をこそ讀みたるべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを、ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がある」と、殿上人などにいひちらして、日本紀の御局とぞつけたりける、いとをかしくぞはべる。このふる里の女の前にてだに、つつみはべるものを、さるところにて才さかしいではべらむよ。

(『紫式部日記』<sup>9)</sup>)

『源氏物語』を女房が讀むのを聞いて一條天皇が『日本書紀』をはじめとする六國史を讀んでいると述べたのは、それほど『源氏物語』に漢學に關する表現が多く織り込まれていることを表す。一條天皇は、何氣なく漢學を基盤にし奥ゆかしい世界を形成している作品の文學生を高く評価しているのである。すなわち、女性が漢學に對する知識を身に付けていることは、それ自体稱賛されるべきことだったのである。ただし、日頃紫式部に惡意を持っていた左衛門内侍は、一條天皇の言葉を、漢學の才を鼻にかける女というように解釋し、殿上人などに「日本紀の御局」というあだ名を付けて言い触らした。女に漢學の才能があることは、稱賛に値することであるが、その才能の出し方によっては非難の對象になることもあったのである。しかし、紫式部はその非難は無實なものと潔白さを主張し、一條天皇に稱揚されるくらい漢才があったことを表面化している。紫式部自身も漢才を誇らかに思ったに違いない。

紫式部が自分の日記において「清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、眞名書きちらしてははべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」と深めてもない漢學の才をみせびらかしたと酷評している清少納言さえも、實は漢才に對しては慎む態度を見せていた。

すなはち立ち歸り來て、「『さらば、そのありつる御文を賜はりて來』となむ、おほせらる。とくとく」と言ふが、いをの物語なりや、とて、見れば青き薄様に、いときよげに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。

#### 蘭省花時錦帳下

と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、いかにかはすべからむ、御前おはしまさば、御覽ぜさすべきを、これが末を知り顔に、たどたどしき眞名に書きたらむも、いと見苦しと、思ひまはすほどもなく責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃に消え炭のあるして、

#### 草の庵を誰か尋ねむ

と書きつけて取らせつれど、また返事も言はず。(『枕草子』七八段)<sup>10)</sup>

當代四大納言の一人藤原齊信に「蘭省花時錦帳下」という意味ありげな問いを受けて、清少納言はただちに返事せず苦心する。當該の贈答は、『白氏文集』卷十七「廬山草堂夜雨獨宿寄

9) 上掲書。p208。

10) 上掲書。p92-p93。

牛二李七庾三十二員外」の第三・四句を基にしたもので、表面的には對句「廬山雨夜草庵中」を要求する形になっている。だが、清少納言は、あれやこれやと悩んだあげく該当の白詩句を和歌の下句にした「草の庵を誰か尋ねむ」を贈る。平素男性貴族の前で機知を振る舞う清少納言さえも、白詩句をそのまま書き表すことはわざとらしい感じになりかねないのである。それは、やはり男文字である漢字を直接書くのは女性としては不自然なことであるし、人にも見苦しいと思われるからであろう。

以上のように、当時の女性の中に漢才があってもそれを表に露にすることはできるだけ避けていたことが明らかになるが、ここで注意すべきことは露にされたらかえって批判の対象になった漢才を、なぜ當時の女性はそれについての學殖を身に付け、またそれを何とか發現しようと努力したのか、の点である。漢詩文に關する才能を極力隠そうとしているかに見える紫式部も、實際は『源氏物語』や『紫式部日記』の中に自分の漢才を仄めかす記事や引用を書き込むことによって何となく公開を意図しているのである。次節では、それについて詳しく考えてみる。

### 3. 理想的な宮中の女性像

宮中の女性が實際漢學の才を持っていたことは、いろいろな文獻によって確認される<sup>11)</sup>。中で、一條天皇の後定子の兄弟は子供の頃から母貴子から本格的な漢學の教育を受け、相當高度の教養をもっていたように思われる。

また、學生ども召し集めて、作文し遊ばせたまけるに、金を二三十兩ばかり、屏風の上より投げ出だして、人々うちたまければ、ふさはしからず憎しとは思はれけれど、その座にては饗応し申してとり争ひけり。「金たまはりたるはよけれども、さも見ぐるしかりしものかな」とこそ今に申さるなれ。人々文作りて講じなどするに、よしあし、いと高やかに定めたまふ折もありけり。二位の新發の御流にて、この御族は、女も皆、才のおはしたるなり。（『大鏡』「道隆伝」<sup>12)</sup>

定子の妹にあたる三の宮が文章生達の詩作の會でその優劣を批評するくらの學才があったことが述べられ、男性だけでなく女性まで一族皆に漢才があったことが強調される。女性の漢詩文に關する素養を持っていることがまるで名家の条件のように語られている。

實際、中宮が女房に漢詩文に關する知識を伝授されることもあったようである。例えば、中宮彰子は女房紫式部に『白氏文集』について進講を受けていた。紫式部は文章道出身の漢學者

11) 当時、女性のための教育機關は存在しなかったので、おそらく漢籍學習は家庭で行われ、教えたのは父親である場合が多かったと見られる。

12) 上掲書。p258。

であった父藤原爲時—『本朝麗藻』等に漢詩作品が見られる—から漢籍の教授を受けているが、その出来が弟惟規よりもよくて男でないことを父爲時に嘆かせるほどであったという。

それを、「をのこだに才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人のいふも聞きとめて後、一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あさましくはべり。読みし書などいひけむもの、目にもとどめずなりてはべりしに、いよいよ、かかること聞きはべりしかば、いかに人も伝へ聞きてにくむらむと、恥づかしさに、御屏風の上に書きたることをだに讀まぬ顔をしはべりしを、宮の、御前にて、文集のところどころ讀ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおほいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬものひまひまに、をととの夏ごろより、樂府といふ書二卷をぞ、しどけながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮もしのびさせたまひしかど、殿もうちもけしきを知らせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。まことにかう讀ませたまひなどすること、はた、かのものいひの内侍は、え聞かざるべし。知りたらば、いかにそしりはべらむものと、すべて世の中ことわざしげく憂きものにはべりけり。 (『紫式部日記』)<sup>13)</sup>

男性さえも學才をひけらかす人は榮達できないといわれ、紫式部は一という文字も書けないふりをして漢字の素養のあることをつとめて人前にあらわさなかったが、中宮彰子の前では人目を憚りながらも『白氏文集』の卷三と四「新樂府」二卷を講讀する。「新樂府」は、白居易が得意とした、当時の政治や社會を批判した作品群(諷諭詩)に屬するが、五言詩、七言詩といった普通の漢詩の形式によらず、前の時代である漢代の歌謠の形式を持っていることが特徴で、全部で五十首収められている。しかも、そのように漢學に興味を見せる中宮彰子に、父の藤原道長(「殿」)は有名な書家に書かせた漢籍を進呈している。それは後の學として漢詩文的教養が重要視されたことを表し、また優れた漢才を持っていた紫式部の存在意義が如何に大きかったか、想像に難しくない。漢字の素養をさりげなく述べる紫式部は、自分の漢學に對する才能への自負が並々ならぬことが看取される。

そのように、場合によっては中宮に漢學の教養教育も行う女房であったが、当時、よい女房の資質としては、例えば次のようなものがあげられる。

かくて、御參り近くなりぬ。御調度、御装ひをうるはしく清らに調ぜられ、御供人、大人四十人、みな四位、宰相の娘、髮丈にあまり、丈よきほどに、手書き、歌詠み、琴、琴弾き、人のいらへすること、みな上手。歳二十余のうち、唐綾、ただの絹一つ混ぜず、みな赤色。

(『宇津保物語』「あて宮」)<sup>14)</sup>

13) 上掲書。p209-p210。

14) 上掲書。p117。

懸想人達が悲嘆に暮れる中、いよいよあて宮の東宮入内が決定的になり、その準備に迫られる場面である。入内に際し、何よりも遜色のない女房が選抜されたことが特筆される。優れた女房をそろえることは、権門勢道家の品格を表わす重要な項目だったからである。すなわち、后(この場合は東宮妃)の入内に追従する女房は、家柄・容姿・才覚のいつれにも秀でた者でなければならず、特に才覚の面では、書道や歌道、音楽の才、「人」との対応の巧みさなどが要求されていた。書道・歌道・音楽の才は、前述した藤原師尹が行った貴族女性の一般教養項目と重なるが、女房の場合それは自分の仕える中宮の教育をまで含めた意味合いである。また、女房は後宮にいながら宮中生活をするため、「人」への巧みな対応も必要であった。「人」というのは、言うまでもなくまずは天皇をはじめとする上達部、殿上人などの男性陣で、その男性陣への対応の具合によって后に對する天皇の寵愛や後宮の盛衰が決まるわけである。漢學が必須項目であった男性官人との話のやりとりがうまく成立するためには、女房達にも當然漢才がなければならなかったのである。

『枕草子』の中には女房が漢詩文による機知を振る舞い、殿上で譽め称えられる場面がよく登場する。次の例を見てみよう。

村上先帝の御時に、雪のいみじう降りたりけるを、様器に盛らせたまひて、梅の花をさして、月のいと明きに、「これに、歌詠め。いかが言ふべき」と、兵衛の藏人に賜はせたりければ、「雪月花の時」と奏したりけるをこそ、いみじうめでさせたまひけれ。「歌など詠むは、世の常なり。かく、をりにあひたることなむ、言ひがたき」とぞ、おほせられける。（『枕草子』一七七段<sup>15)</sup>

雪の降る月夜、梅の花を見て詠歌の要求を受けた兵衛の藏人が『白氏文集』卷二十五「殷協律に寄す」の「琴詩酒友皆抛我。雪月花時最憶君」の一部を吟じ、村上帝に譽められたことが記されている。白詩句は、『和漢朗詠集』「交友」にも見えるもので、琴や詩や酒の友がみな私を見捨てて散り散りになった雪月花の折に君のことを思い出すという内容である。兵衛の藏人は、月夜の雪の上の梅花なのでこの詩を奏したのだが、「最モ君ヲ憶フ」を口に出さないで自己の主上を思い申し上げる意を披瀝した機轉が巧みなのである。この場合では女性であるにもかかわらず、漢詩文引用がむしろ折に合う和歌の詠出に勝るものとして評価されている。村上朝は漢詩文が盛んで勅命によって『日觀集』が編纂されたり、多くの詩會が催されたりしていた時期であって、そのような文化的風潮が女房達にも及んでいたことが窺われる。一條天皇の祖父である村上朝の逸話を引用したに違いない定子側もそのような漢才による機知を自分の後宮の女房に望む意図があったことは言うまでもない。

清少納言の漢詩文引用について「したり顔にいみじうはべりける」人と規定し、「さばかりさかしだち、眞名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」と、その

15) 『枕草子』の本文引用は、石田穰二氏校注(1979・8)『枕草子 下』角川文庫による。以下同様。p64。

知識の断片性を酷評した紫式部さえも、男性官人と漢詩文によるやりとりを行い、優雅な場面を演出している。

月おぼろにさし出でて、若やかなる君達、今様歌うたふも、舟にのりおほせたるを、若うをかしく聞こゆるに、大藏卿のおほなおなまじりて、さすがに、聲うち添へむもつつましきにや、しのびやかにてゐたるうしろでの、をかしう見ゆれば、御簾のうちの人もみそかに笑ふ。「舟の中にや老をばかこつらむ」といひたるを、聞きつけたまへるにや、大夫、「徐福文成誑誕多し」と、うち誦じたまふ聲も、さまも、こよなういまめかしく見ゆ。  
(『紫式部日記』)16)

月下舟遊びをする中に、大藏卿(藤原正光)が年甲斐もなく(当時五十三才)若い君達の仲間に入っている。それを見た紫式部が『白氏文集』卷三「海漫漫」の詩の一句に「童男卯女舟中老」に基づき、「舟の中で老いの身を嘆いているのでしょうか」とつぶやく。不老不死の薬を求めて徐福に従って行った童男卯女が蓬莱に至らぬうちに舟中で老いたという故事を、年老いた舟中の大藏卿になぞらえて言ったのである。それを「海漫漫」の詩によったものと悟った当時最高の教養人藤原齊信(中宮の大夫)は、「徐福文成誑誕多し」と、すぐにそれに続く句を誦じ、微笑ましい場面を作り出している。ここでも、漢詩句そのままのかたちではないが、女性である紫式部が漢詩句に基づく表現によって機知を發揮していることが確認される。男性である齊信も紫式部の漢才を非難するどころか、かえってそれを喜び快く応じている様子である。

そのような平安女房における漢詩文受容の實態は、『枕草子』の次の段において端的に表わされていると言えよう。

文は文集。文選。新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文。(『枕草子』二〇〇段)17)

「文」とは、漢籍並びに漢字で書かれた文章をさし、「(白氏)文集」「文選」「史記」は中國傳來の漢籍であり、「願文」「表」「博士の申文」は漢字で書かれた日本の漢文書、「新賦」は『文選』の文體の卷初にある「賦」の新なるもの、「五帝本紀」というのは『史記』の卷頭の一巻をそれぞれさしている18)。

當該の段は、当時の女流文學者の學問的關心分野を表わすという意味で示唆するところが大きい。漢字の世界は、勿論貴族階級、知識階級の男性の領域であった。當時男性の必讀書は中國渡來の、經書、史書、文選、『白氏文集』等であったが、後宮の才女達は、その男性の漢字文化圏と交渉を持ち知識と學問をともに兼備していた。宮中に出仕し文學的才能を競い

16) 上掲書。p213-p214。

17) 上掲書。p86。

18) 西原富美子氏の上掲論文。p151。

合って女主人を盛りたてた女房達は、假名を書き歌を詠み、漢字で書かれた日本の文章書籍を読むことができ、中國の書物までその対象の範囲が及んでいたのである。『枕草子』が第一の讀者を女房に想定して女房の立場で書いたものであることを考えれば、女房にとって漢詩文は、暗黙のうち身に付けるべき教養の一つとされていたのではないか、という推測を可能にする。漢詩文は理想的な宮中女性になるための必須的な条件の一つだったことが考えられる。

## 4. 女房の出世と漢詩文

ところで、宮中女性、中でも女房にとって漢詩文的素養は、男性貴族との社交的必要性に限られたものではなかった。それは、女房達が表面的には慎む姿勢を堅持しながらも実際の場合や日記においては自分の漢才を何とかして示そうとする、二重的な姿を見ていることも深く関連する。

當時女房、特に學才のある女房にとって名譽ある官職とされたのは、他ならぬ内侍であった。内侍とは、後宮十二司のひとつ内侍所(溫明殿賢所)に奉仕し、天皇に近侍して奏請・伝宣をつかさどる、尚侍(定員2名)、典侍(定員4名)、掌侍(定員4名)などの女官をさす。内侍所の長官尚侍は、もともとは從五位だったが、平城天皇の時代に從三位に上がり、女御・更衣に準ぜられるようになった。また、典侍は、内侍所の次官で通常は從六位相当だが、二位、三位に上がった例もある。掌侍は、内侍所の判官で、天皇移御の際に神璽御劍を捧持する役である。もともとは從七位相当だが、後に五位になった。四人の掌侍のうち第一位の者を勾当の内侍という。「内侍」という場合は、通常この掌侍を指す<sup>19)</sup>。尚侍には大臣の女から出仕する者が多く、更衣に准じて、春宮妃となったり、天皇の寵を蒙るものもあるのに比して、典侍は、中下流貴族の女からも昇進し得たし、天皇の乳母になるものもあったので、一般の女官の中では、最も望ましい官職とされていた<sup>20)</sup>。

清少納言も平常内侍に對する羨望の念を抱いていたことが、次の段によく表わされている。

女は内侍のすけ。内侍。(『枕草子』一七一一段<sup>21)</sup>)

すなわち、典侍や内侍を理想視し、女性の官職としては最高であると斷言している<sup>22)</sup>。

19) 『後宮職員令』に、「尚侍二人。掌供奉、常侍、奏請、宣傳。檢校女孀、兼知内外命婦朝參、及禁内禮式之事。典侍四人。掌同尚侍。唯不得奏請宣傳。若無尚侍者、得奏請宣傳」とある。

20) 例えば、和泉式部の場合は、父親の雅致が學問の家である大江家の出身で東宮學士を勤めており、母親が冷泉天皇の後昌子内親王の乳母内侍と伝えられている。当時女性の漢學に關する才能は、多く家庭的な環境で培われたと考えられる。

21) 上掲書。p59。

ところで、その内侍には、漢詩文に関する教養が必須であった。例えば、娘に対する愛情が大きかった父親の話がある。

親のいとよくかしづきける人のむすめありけり。女のする才の限りしつくして、今は書讀ませむとて、博士にはむつましからむ人をせむとて、異腹のこのかみ、大學の衆にてありけり、異腹なりければ、うとくて、「あひ見ず」などありけれど、「知らぬ人よりは」とて、すだれ越しに、几張たててぞ、讀ませける。… れいの書讀みに、「内侍になさむ」の心ありて、親は書教ふるなりけり。文かよはしにはしゝたれど、この兄、心をまどはして、思ひ出でられけり。 (『篁物語』)<sup>23)</sup>

ある箱入り娘に、親が漢籍を教えるべく、赤の他人よりは安心できる異母兄(篁)を呼び寄せて簾越しに講讀を行っている場面である。娘を内侍にするために、父親は漢書について教育を施している様子が確認される。

また、實際、女房として出仕し漢學に秀れたため内侍に任命されたこともある。

この中納言殿、才深う、人にわづらはしとおぼえたる人の、國々治めたりけるが、男子女子どもあまたありける、女の、あるがなかにいみじうかしづき思ひたりけるを、男あはせんなど思ひけれど、人の心の知りがたうあやうかりければ、ただ、宮仕をせさせんと思ひなりて、先帝の御時に、おほやけ宮仕に出し立てたりければ、女なれど、眞字などいとよく書きければ、内侍になさせたまひて、高内侍とぞいひける、この中納言殿、よろづにたはれたまひけるなかに、人よりことに心ざしありて思されければ、 (『榮花物語』「さまさまのよろこび」)<sup>24)</sup>

道隆が多くの才女のうち娶った高階成忠の娘貴子は、先帝(円融帝)の時女房として宮仕えをしており、漢學に関する教養が高かったため内侍に任命され高内侍と称されるのである。

女官の最高位を占める内侍司の長官尚侍は、「令」の規定では「奏請宣伝」を職務とした<sup>25)</sup>。この内侍の職務のうち「奏請」については、内侍掌侍が文書を讀み上げるかたちをとっていたと見られる。次の資料に見てみよう。

大臣奏見參 内侍取之奏聞返給。(『江家次第』第十四 大嘗祭御禊定條)<sup>26)</sup>

22) 『枕草子』の中には、他にも内侍に対する憧れが表されている所がある。

23) 『篁物語』の本文引用は、遠藤嘉基氏・松尾聰氏校注(1964・5)『篁物語 平中物語 浜松中納言物語』日本古典文學大系 岩波書店による。p56。

24) 『榮花物語』の本文引用は、山中裕生氏・秋山虔氏・池田尚隆氏・福長進氏校注(1999・8)『榮花物語①』新編日本古典文學全集 小學館による。p142。

25) 「文書行政」と呼ばれた律令制的行政形態は、一一世紀にはすでにほぼ完全に解体するようになるが、宮廷の諸實務が文書を媒介にせず執行されたことは、考え難い。

26) 『江家次第』の本文引用は、覆刻日本古典全集(1978・7) 歴史1 『江家次第』現代思潮新社による。p211。

内侍執諸衛奏文奏之。(『小野宮年中行事』五月三日條)<sup>27)</sup>

すなわち、内侍が奏状を取って「奏聞」しており、また「奏文を執」って「之を奏した」とある。これは、内侍が漢文による文書作成や文書讀解に長けていないと、遂行できない職務である。内侍にとって漢學の教養は基本條件だったのである。清少納言も漢詩文による才知を認められ、内侍に推薦されたことが見られる。

二月つごもりころに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司來、「かうてさぶらふ」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の」とてあるを見れば、懷紙に、

すこし春あるここちこそすれ

とあるに、今日のけしきにいとようあひたるを、これが本は、いかでか付くべからむと、思ひわづらひぬ。「誰々か」と問へば、「それぞれ」と言ふ。皆いとはづかしき中に、宰相の御答へを、いかでかことなしびに言ひいでむ、と、心一つに苦しきを、御前に御覽せさせむとすれど、上のおはしまして御殿籠りたり。主殿司は「とく、とく」と言ふ。げに、遅うさへあらむは、いと取り所なければ、さはれとて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書いて取らせて、いかに思ふらむと、わびし。これがことを聞かばや、と思ふに、そしられたらば聞かじとおほゆるを、「俊賢の宰相など、『なほ内侍に奏してなさむ』となむ定めたまひし」とばかりぞ、左兵衛の督の、中將にておはせし、語りたまひし。

(『枕草子』一〇二段 28)

當代の教養人として第一人者である藤原公任に『白氏文集』第十四「酬和元九東川路詩」の一首「南秦雪」領聯の第三句「二月山寒少有春」に對して、第四句「三時雲冷多飛雪」に基づいた「空寒み花にまがへて散る雪に」句をもって答え讚辭を受けたことが記されている。

また、紫式部も自分の漢才について述べる時、競争相手として内侍を強く意識している部分がある。

左衛門の内侍といふ人はべり。あやしうすずろによからず思ひけるも、え知りはべらぬ、心憂きしりうごとの、おほう聞こえはべりし。

内裏のうへの、源氏の物語人に讀ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ讀みたるべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを、ふと推しはかりに、「いみじうなむ才

27) 『小野宮年中行事』の本文引用は、塙保己一氏編(1960)『小野宮年中行事』群書類従 第6輯 改訂3版 續群書類従完成會による。p178。

28) 上掲書。p147。

がある」と、殿上人などにいひ散らして、日本紀の御局とぞつけたりける、いとをかしくぞはべる。このふる里の女の前にてだに、つつみはべるものを、さるところにて才さかし出ではべらむよ。…まことにかう讀ませたまひなどすること、はた、かのものいひの内侍は、え聞かざるべし。知りたらば、いかにそしりはべらむものと、すべて世の中ことわざしけく憂きものにはべりけり。  
(『紫式部日記』29)

紫式部が『源氏物語』を讀んだ一條天皇に漢學の才を賞讃されたことや、それを内侍が嫉妬深く擲揄していることが記されている。ここで左衛門の内侍とは、内裏の女房で藤原理明の妻となった掌侍橘隆子をさす。紫式部はその内侍からの擲揄が如何に不当であるかを主張しているが、それだけ紫式部は内侍に對してのライバル意識を持っていたことになる。内侍という官職が女性の官人として最高位の名譽ある官職だった事實は、紫式部にもそのまま投影し表わされているのである。当時の女房にとって内侍は、それだけ魅力的なものだったに違いない。

## 5. 終わりに

以上のように、平安宮廷女性と漢詩文の關係について考察してみた。当時の女性は、男性の教養とされた漢詩文に對して表面的には露に表わさない消極的な態度を見せながらも、實は何とかして自分の素養を發現しようと努める、二重的な姿勢を保っていた。それは、漢詩文に關する才能が天皇や上達部、殿上人の男性官僚に接する宮中女性にとって社交の具として有用だったことも勿論あろうが、女房のような女性にはそれが理想とした官職に付くための基本條件だったからだと考えられる。すなわち、女房の官職の中で内侍という名譽ある職に就くためには、漢才は必須だったのである。内侍という官職は、漢文による文書作成や文書讀解に長けていないと遂行できない職務だった。平安時代、漢詩文は、男性貴族だけではなく、實は學才のある女性にとっても出世のためにはかなり重要な項目であったことが新しく浮上するわけである。

29) 上掲書。p208。

## 【参考文献】

- ・藤原克己氏(1995・5)「王朝漢詩の意義について」『國語と國文學』
- ・池田源太氏(1967・11)「平安朝に於ける文章の經國的性格の変色」『龍谷史壇』
- ・後藤昭雄氏(1969・8)「一條朝詩壇と本朝麗藻」『國語と國文學』
- ・西村富美子氏(1984)「平安女流文學と漢詩文」『國際仏教大學文學部紀要』
- ・山本利達氏(1990・12)「漢學と女性—紫式部日記覺書」『滋賀大國文』
- ・志村綠氏(1986・6)「平安時代女性の眞名漢籍の學習——一世紀ごろを中心に」『日本歴史』
- ・石田穰二氏校注(1979・8)『枕草子 上・下』角川文庫 p35
- ・中野幸一氏校注(2001・5)『宇津保物語』新編日本古典文學全集 小學館 p474-p475
- ・橘健二氏・加藤靜子氏校注(1996・6)『大鏡』新編日本古典文學全集 小學館 p258-p259
- ・中野幸一氏校注(1994・9)『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』新編日本古典文學全集 小學館 p204
- ・阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男氏校注(1994・3)『源氏物語①』新編日本古典文學全集 小學館 p89
- ・遠藤嘉基氏・松尾聰氏校注(1964・5)『篁物語 平中物語 浜松中納言物語』日本古典文學大系 岩波書店 p56
- ・山中裕生氏・秋山虔氏・池田尙隆氏・福長進氏校注(1999・8)『榮花物語①』新編日本古典文學全集 小學館 p142
- ・覆刻日本古典全集(1978・7) 歴史1『江家次第』現代思潮新社 p211
- ・塙保己一氏編(1960)『小野宮年中行事』群書類從 第36輯改訂3版 續群書類從完成會 p178

## 要 旨

平安時代の初期に隆盛した漢詩文は、攝關政治の絶頂期の一統朝に復興し、宮中を中心にした漢詩文化圏が最も活潑になる。その漢詩文化圏は主に男性貴族を中心にして形成したが、實は当時假名によって文學を營爲していた女性とも緊密な関わりを持っていたと考えられる。従來の研究においては、女性の漢詩文化圏への接觸を、主に後宮で男性貴族を相對にし機智をふるまう手段として解していた。それは、女性が男性貴族の前で漢詩文表出を憚り、直接的な漢詩文引用を避けようとする姿に大きく依存するものである。

しかし、私見によれば、女性、特に宮中女性にとって、漢詩文はそれより遙かに大きな意味合いを有するものであった。すなわち、天皇の后や女房のような宮中女性にとって漢詩文は、表面的にはそれに關する素養を隠蔽しようとする姿勢を取りつつも、何とかして漢才を發現しようとするため、二重的なものである。漢學に關する才能は、女房のような女性が理想とした官職、すなわち内侍に付くためには必須の條件だったからである。内侍という官職は、漢文による文書作成や文書讀解に長けていないと遂行できない職務である。宮中の女性、中で學才が認められ宮中に迎え入れられた女房達は、女官としては最も名譽のある官職、内侍に選ばれるためには、漢詩文に關する學殖を身に付け、それをおおやけに知らせる—勿論露骨に表すことは憚れた—必要があったのである。これによって、平安時代漢詩文は男性貴族だけではなく女性にとっても、出世のためにはかなり重要な項目とされていた事實が新しく浮上してくる。

キーワード：平安時代、漢詩文化圏、女性、女房、出世、二重性、内侍、白詩、教養

투 고 : 2005. 5. 31

1차 심사 : 2005. 6. 11

2차 심사 : 2005. 7. 2

住 所 : (302-735) 대전시 서구 도매동 439-6 배재대학교 일본학과

電 話 : 042-520-5363

e-mail : sunbun@pcu.ac.kr